

## 序 論

- 昨日、悪天候の中でしたが、無事2017年の「子供夏期学校」のフィナーレとしてのお祭りが終わりました。教会内外の沢山の方々のご協力を得て、合計86名の参加者で素晴らしい時を持つことができました。
- イエス様は、「誰でも、幼子のようにならなければ、神の国に入ることはできない」と言われた。毎年思うことは、「子供たちの世界」の素晴らしさです。
- それは、文化・宗教・人種を越えて、また、様々な社会的事情をも超えて、真理に対して、素直で、まっすぐに応答できる姿勢です。
- だから、子供たちは、あらゆる違いを越えて、自然に一つとなることができる。
- パウロはコリント書で、「悪事においては幼子、考え方においては、大人になりなさい」(第I14章20節)と言っているが、言い換えれば、「理性的・良識においては、大人となるべきであるが、心は、いつまでも幼子のような素直で純粹であるべき」と言うことになる。
- 神様は、特に私たちが、神様に対して、具体的には、神様の言葉と語りかけ、即ち聖書の言葉に対して、このような心をもって応答することを期待しておられる。
- 折しも、私たちの子供の教会学校でも、使用している教材のカリキュラムに従って、つい先日、イエス様の語られた有名な「種まきの譬え」話について学んだ。
- この譬え話の重要性は、3つの共観福音書であるマタイ、マルコ、ルカのすべてに載せられていることから指摘できる。今日は、そのうちのルカを選ばせて頂いた。
- イエス様は言われた。種を蒔くもの、即ち、神様が、種、即ち、み言葉、聖書の言葉を、土地の上に蒔いた。その種が、よくあることであるが、4種類の土地の上に落ちた。即ち、4種類の人々の心に入ったと。

## 本 論

1. **この譬え話から学ぶ最初のことは、この話の結論部分(8、15節)に出て来る「実を結ぶ」ことの大切さである。**
  - A. **神様がイスラエル民族に対して、フラストレートなさりと、落胆されたことは、神様のあらゆる努力にもかかわらず、期待していた甘い実を結ぶことがなかったことである。イザヤ5章1-7節**
  - B. **イエス様も同じように、イスラエル民族が、実を結ばなかったことに強い嘆きを表された。**
    1. イエス様は、人間としては、イスラエルに生まれ、
    2. イスラエル民族の中に住み、生き、育てられた。
    3. そして、そのど真ん中で、メシヤ宣言をなさり、力の限り福音を述べ伝えて奉仕した。
    4. にもかかわらず、彼らは、実を結ぶどころか、救い主を拒み、十字架に付けた。
    5. そのイエス様の怒りと嘆き、悲しみを表したのが、あの受難週のさ中、イスラエル民族を象徴するいちじくの木が、実を結ばなかったゆえに、呪われて枯れると言う出来事であった。マタイ21章18-20節
  - C. **更に、イエス様は、私たちすべてが「実を結ぶ」者になって欲しいと何回も述べられた。この譬え以外でも**
    1. ヨハネ12章24節「・・・」
    2. ヨハネ15章2(2回)、4節(2回)、5、8、16節
  - D. **パウロもまた、御霊の実として、私たちが実を結ぶことを奨励している。ガラテヤ5章22-23。**
  - E. **そもそも、人間は、「実を結ぶ」ことを期待し、期待され、それを目標として生きる存在であり、そのように造られたのである。**
    1. 私たちを取り巻く社会は、「結果がすべて」と言う社会である。どんなにプロセスで頑張っても、結果が出なければ、全く認められないと言う社会と言っても過言ではない。
    2. 聖書は、そのような社会に反対する。しかし、同時に、上記したように、聖書もまた、私たちの人生に結実を約束するのである。
    3. 結果が得られない人生は、「徒労」の人生であり、「空しい」人生である。だから、結果は期待されるべきである。

4. しかし、この点において、しばしば見られる一般社会における問題と間違いは、結果とプロセスに対する評価の基準が間違っていることである。
- (1)それは、余りに物質的、世俗的、皮相的価値観に基づいた評価であり、
  - (2)それは、また、現世的である。即ち、遅かれ早かれ消えゆく結果である。
5. しかし、この点で、聖書が言う結果、結実、明確にそれら一般社会で言う結果、結実とは違っている。聖書の言う結実、
- (1)この地上で消えていくものではなく、永遠に続くものである。
    - ヨハネ 15 章 16 節「あなた方が実を結び、その実が残るためであり」
    - パウロは、私たちの人生がこの肉体の死をもって終わるものではない。「復活」によって永続し、それゆえ、私たちの地上でした労苦は決して無駄にならないと宣言する。「……」(I コリント 15 章 58 節)
  - (2)また、その本質は愛である。
    - ガラテヤ 5 章 22-23 節：ここで、原語は、英訳にも表されているように、The Fruit of the Spirit is Love, Joy, Peace, Patience, Kindness, Goodness, Faithfulness, Gentleness, and Self-Control である。
    - その動詞が、単数の IS であることから、御霊に満たされた生涯の結実、一言、「愛 LOVE」であり、それ以下はその愛を説明している言葉であると、多くの聖書解釈者たちは理解する。
    - それゆえパウロを通して神様はこのようにも言われる。「愛は決して絶えることはありません。預言の賜物ならば廃れます。異言ならばやみます。知識ならば廃れます。……、いつまでも残るものは、信仰と希望と愛です。その中で、一番すぐれているのは愛です」と(I コリント 13 章 8 節、13 節)。
  - (3)最後に決定的な違いは、聖書における人生の結実、結果は。
    - 神様ご自身が保証し、約束していただくことで、
    - 私たちの責任は、プロセスにあることである。プロセスさえ忠実にやっているなら、結果は神様の方で責任を持つと約束していただく。
    - 私たちの人生のフラストレーションは、どんなにプロセスを頑張っても、思うような結果が出ないばかりか、しばしば、不公平、不条理な結果となることである。
    - だから、私たちは、結果を神様に委ねて、ひたすら、プロセスである自分が今なすべきことに忠実であることが求められている。
    - イエス様は、この点をこの種まきの譬え話の中で、私たちが神様のみ言葉に対して忠実であれば、結果・結実、約束・保障されていると言われる。
    - 大切なことは、私たちがプロセスとして、どのような態度を心に蒔かれた種である聖書の言葉に対して取るかであると言われるのである。

## II. イエス様は、それゆえ、ここに4種類の神様のみ言葉に対する私たちの態度のパターンを挙げられ、私たちにあなたはどれを取るか、取っているかと問われ、挑戦されるのである。

### A. 第一のパターンは、「道端に落ちた種」である。5、12節

1. イエス様が元々使われていた言葉は、ヘブル語、アラマイク語であるが、それらの言語で言う「道」(デレク)とは、元々「固く踏み固められたもの」という意味である。
2. 即ち、道の表す心とは、踏み固められ、固くされたもの、「心の頑なさ」を意味した。
3. 自分の意見、考えを正しいとして、それで固められ、他のもの、他の考え、神様の言葉と言われる、聖書の言葉をさえ受け入れようとせず、拒絶する心の態度である。
  - (1)有名人、成功した人たちの残す名言、名句に耳を傾ける人、関心を示す人は少なくない。
  - (2)しかし、そのように考えるなら、イエス・キリストほど、歴史上で世界的に影響を与え、尊敬された人物はいただろうか？
    - 世界中の多くの人々から尊敬されるあの人格的政治家と言えるガンジーの言葉、「私の人生に最も大きな影響を与えた書物は聖書である」。

- このような聖書に関する証言は枚挙するにいとまがない。
  - 最近確かめていないが、長い間、聖書は、「永遠のベストセラー」と言われ、世界で最も読まれる本であり、
  - 「もし、陸の孤島で過ごすために一冊だけ本をもっていくとするなら、どの本をもっていくか？」と言うたぐいの質問でいつもトップに選ばれてきた本である。
- (3)ある意味で、道端の心とは、そのような聖書の言葉に関心も尊敬も払わず、無視、拒絶する頑なな心である。

4. そのような心の人にイエス様は言われる。

- (1)今、その神の言葉の種が蒔かれているうちに、それを受け入れなさい。
- (2)そうでないと、それはいつまでもそこにはないですよ。
- (3)鳥が来て道端の種をついばんで持って行ってしまうように、サタンは二度とそのチャンスがないようにと神の言葉をあなたの心と人生から取り去っていきますよ、と。

5. 聖書は言う、「今は恵みのとき、今は救いの日です」(Ⅱコリント 6章2節)。だから「今日もし御声を聞くならば、あなた方の心を頑なにしてはならない」(ヘブル 4章7節)。

### B. 第二のパターンは、「岩の上に落ちた種」である。6、13節。

1. これは、直接岩の上に落ちた種と言う意味ではなく、他の箇所では、「土の薄い岩地」となっているように、表面に薄く土の部分があって、その下に固い岩がある土地である。
2. この種は土が薄いので、すぐに芽を出すが、下が岩なので、根が十分に生えていない。それで、十分に水分を吸い上げることができず、強い日に照らされると間もなく枯れてしまう。
3. イエス様は言われる。
  - (1)これは、み言葉を聞くと、「これは良い、自分に役に立つ」とすぐに受け入れるが、
  - (2)信仰には、困難、試練、迫害が伴うことが、分かってくると、信仰をいとも簡単に捨ててしまう人のことであると。
  - (3)その理由は、「信仰の根が無い」からだといエス様は言われる。「信仰の根」とは何か？ それは、イエス様の「十字架」の理解である。
    - なぜ、イエス様が十字架にかかったのか？
    - なぜ、イエス様の十字架が私たちの救いなのか？ 等々
 についての理解を深めることである。
  - (4)パウロは言った。「十字架の言葉は、・・・救いを受ける私たちには神の力である」(Ⅰコリント 1章18節)。
  - (5)この十字架と言う根がない信仰は、自分にとってご利益的な部分に問題が出て来ると、信仰を放棄するのである。

### C. 第三のパターンは、「イバラの地に落ちた種」である。7、14節。

1. この種は、確かに芽を出し、育った。しかし、その周囲にイバラも一緒に育った。イバラは、野生種で、非常に勢いがよく、強く、せっかく育ったものの上に覆いかぶさって来たので、押しつぶされて、成長が止まってしまった。
2. イエス様は、これを、信仰者が、ある程度育つには育つが、「この世の心遣いや、富や、快樂によってふさがれて、実が熟するまでにならない」状態と同じだと言われる。
3. 「この世の」とある言葉に注目したい。クリスチャンの成長において、大切なことは、「信仰者と世との関係」である。
4. しばしば言われるが、イエス様が、最後の晩餐のとき、弟子たちに繰り返し言われたことは、「あなた方は、世にいるが you are in the world、しかし、あなた方は、世に属するものではない You are not of the world」。
5. これは、丁度、「船と水」の関係と同じである。
  - (1)「船」はクリスチャン、「水」はこの世である。
  - (2)船が水に触れている、即ち、船が水の上になければ、船は無用の長物で、「丘の上の河童」みたいに、無意味、無用の長物である。
  - (3)同様に、クリスチャンも世から離れてはならない。(パリサイ人)

- (4) クリスマスは、世の光、地の塩として、世と共にいなければならない。(イエス様)
- (5) しかし、同時に、船の中に水が入ってきたら、船は沈むだけである。同様に、クリスマスの心の中に世的なスピリットが入ってきたら、クリスマス人生も沈没しかない。
6. 聖書はパウロを通して私たちと世との関係についてこのように言う。ローマ 12 章 2 節
- (1) 「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神の御心は何か、即ち何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい」と。
- (2) このお言葉に従って私たちの心と生活を再点検したい。●この世と調子を合わせていないか？ ●みんながしているからするのではなく、むしろ、信仰者として何をするべきか、積極的に神の御心を求めているだろうか？ ●世に埋没するのではなく、そのように、クリスマスとして、世の光として輝くためには、自分が変わり続けなければならないことを自覚し、それを祈り、経験しているだろうか？

#### D. 第四のパターンは、「良い地に落ちた種」である。8、15 節。

1. イエス様は、この「良い地」については、15 節で、「正しい良い心でみ言葉を聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです」と説明された。
2. ある意味で、この良い地とは、これまで学んできた 1-3 までのパターンが表してきた、間違った心の状態を「反面教師」とした心の状態である。即ち、
  - (1) 道端に落ちた種から：心を頑なにせず、素直にみ言葉に聞き、受け入れ、
  - (2) 岩地に落ちた種から：いつも「十字架」への感謝の原点に立ち、その理解を深め、
  - (3) イバラの地に落ちた種から：世と妥協していないか、絶えず自らの信仰を点検し、神への献身を新たに作る心と姿勢である。
3. しかし、イエス様は、そのような反面教師的な面だけでなく、この「良い地」の大切な特色として、「よく耐えて」と言われた。
  - (1) 忍耐である。
  - (2) 私たちは、実を結ぶために余りに忍耐が足りない。短期である。
  - (3) 信仰生活を、まるで、自動販売機で物を買うときのように思っている。お金を入れて、ボタンを押したら次の数秒で、ゴトンゴトンと音を立てて、欲しい物が出てくるかのように思っている。
  - (4) しかし、聖書は、信仰生活の大切な要素として忍耐の大切さを強調する。
    - ヘブル 10 章 36 節
    - ヤコブ 1 章 2-4 節
    - Ⅱペテロ 1 章 5-7 節
    - ローマ 5 章 3-5 節
    - 詩篇 1 篇 3 節「時が来ると実を結び」：それは実が結ばれるまでの忍耐を意味した。
    - ヤコブ 5 章 11 節：ヤコブはヨブの試練から学ぶことは、ヨブの忍耐であると言う。
  - (5) 近年、信仰が誤解されている傾向がある。それは、「信じます」と言って、目をつぶって、次の瞬間、目を開けるとすべては変わっているという、どちらかと言うとインスタネリアスな信仰である。
  - (6) しかし、聖書的な信仰は、どちらかと言うと、詩篇の作者がしばしば、「いつまでなのですか?!」と叫ぶように、アブラハムが、約束のものを受けるために 25 年も待たされたように、どんなに長引いても、忍耐して、信じて疑わず、待つ信仰である。

#### 結 論

- ヨハネ 15 章 16 節にあるように、私たちがクリスマスとして神様に選ばれたのは、いつまでもなくなる実を結ぶことである。
- 大切なものは一杯ある。しかし、いつまでも残る、一番大切なものはなにか？を聖書からしっかりと聞き、聖書にしたがって、実を結ぶ生涯を歩みたい。